

## 《可能》における自動詞の形態的分類と特徴

青木ひろみ

### Classifications and Characteristics of the Intransitive Verbs for Potentials in Japanese

Hiromi Aoki

Japanese potential forms can be created by adding the suffix *-(ar)eru* or the phrase *kotogadekiru*. However, some intransitive verbs with this suffix or phrase produce ill-forms. In this study, I will demonstrate that intransitive verbs can be classified into four types and the analysis of their characteristics in the following terms; (1) agentivity, (2) semantic role and (3) semantic nature. The result is related to the concept of volitionality. The potential of intransitive verbs, which semantically indicate volitionality, can be achieved by adding *-(ar)eru* and *kotogadekiru*. The intransitive verbs, which do not indicate volitionality, have potential forms since they already implicate the meaning of potentials.

【キーワード】 意志性、動作主性、意味役割、動詞の意味特徴

#### 1. はじめに

《可能》という観点から日本語の動詞を見ると、他動詞では接辞「(ら)れる」の付加によってその形が作られ、さらに「ことができる」という表現形式を用いても表すことができる。一方自動詞では、他動詞と同様、接辞「(ら)れる」の付加、及び「ことができる」両方の表現形式と共起するもの、「ことができる」のみとしか共起しないもの、さらにどちらの表現形式とも共起しないものというように、他動詞の《可能》とは形態上異なる特徴が見られる。《可能》の接辞「(ら)れる」は、「意志性」のある殆どの他動詞に付加されると言われているものであるが、本稿では、このような「意志性」の問題を踏まえ、《可能》における自動詞の特徴について(a)主体の動作主性(agentivity)、(b)意味役割 (semantic role)、及び(c)

## 言語科学研究第3号(1997年)

動詞の意味特徴 (semantic nature) という三つの点から考察を進めていく。

## 2. 《可能》の形態から見た自動詞の分類

### 2.1 分類方法

自動詞を《可能》の接辞「(ら)れる」、及び「ことができる」と共起するか否かで形態上分類すると、次の表1のように四つに表示することができる。

表1

	自動詞の例	(ラ)レル	コトガデキル
タイプ1	上がる、止まる、集まる、動く、変わる	○	○
タイプ2	受かる、助かる、育つ、増える、覚める	×	○
タイプ3	決まる、載る、開く、閉まる、広まる	×	×
タイプ4	見える、割れる、折れる、切れる、焼ける	×	×

タイプ1にあげた自動詞というのは、例えば、「上がる」のように「上がる」「上がる」という両方の《可能》の表現形式を持つものである。これに対して、タイプ2にあげた自動詞は、「受かる」のように接辞を付加させて「受かれる」という形を作ることにはできないが、「受かることができる」という表現を用いて《可能》を表すことができると思われるものを指す。これら二つのタイプは、《可能》の表現形式と共起する自動詞と言える。また、タイプ3、4にあげた自動詞は、どちらの表現形式とも共起しないことを示している。例えば、タイプ3の「決まる」から「決まれる」「決まることができる」という形を作ることにはできない。同様に、タイプ4にあげた自動詞、「割れる」からも《可能》の形を作ることができない。このタイプ4にあげた自動詞「割れる」は、他動詞「割る」の《可能》「割れる」と同形であることから、タイプ3に分類した自動詞とは区別してある。

## 《可能》における自動詞の形態的分類と特徴

## 2.2 分類結果

先の表1から次のような結果が得られる。自動詞の中でも「(ら)れる」と共起するのは、タイプ1にあげた自動詞のみである。動詞の下位分類から言えば、タイプ1の自動詞がいわゆる「意志性」のある自動詞ということになる。このことから、「ことができる」のみとしか共起しないタイプ2の自動詞は、タイプ1にあげた自動詞より「意志性」が低いと考えられる。「ことができる」はタイプ1、2両方にあげた自動詞と共起することから、「(ら)れる」より共起する動詞の範囲が広く、「(ら)れる」と「ことができる」によって表される《可能》の意味の違いは、これらの自動詞の違いということを示唆している。また、タイプ3、4の自動詞は、どちらの《可能》の表現形式とも共起しないことからタイプ1、2のような「意志性」は関与していないと考えられる。これらの自動詞には、《可能》が含意されている可能性もあり得る。《可能》に関与している「意志性」の問題は、他動性 (transitivity) の研究でも取り上げられているものであることから、まず他動性の研究から《可能》に関わる要因を抽出し、先の表1に示した自動詞の特徴についての考察に入る。

## 3. 《可能》と他動性

《可能》の表現形式と共起する動詞の特徴には、「意志性 (1a)」という要因が関わっていると考えられる。本稿では、Hopper and Thompson (1980) の研究から、「意志性」の表出に関わる要因として、さらに次の「参加者 (1b)」「動作主性 (1c)」、及び「動性 (1d)」を取り上げて見ていく。

(1)

- a. VOLITIONALITY: The effect on the patient is typically more apparent when the A is presented as acting purposefully; contrast *I wrote your name* (volitional) with *I forgot your name* (non-volitional).
- b. PARTICIPANTS: No transfer at all can take place unless at least two participants are involved.
- c. AGENCY: It is obvious that participants high in Agency can effect a transfer of an action in a way that those low in Agency cannot. Thus the normal interpretation of *George startled me* is that of a perceptible event with

## 言語科学研究第3号(1997年)

perceptible consequences; but that of *The picture startled me* could be completely a matter of an internal state.

- d. KINESIS: Actions can be transferred from one participant to another; states cannot. Thus something happens to Sally in *I hugged Sally*, but not in *I like Sally*.

この(1)の(a)から(d)の記述からも分かるように、「意志性」という観点から《可能》について考察していくには、それぞれの要因が関連していると捉える方が自然であると思われる。つまり、「意志性」には(i)主体が有生(animate)なのか、あるいは無生(inanimate)なのかという「動作主性」の要因が関係している。次に、(ii)「動作主(agent)」「被動者(affected、object)」あるいは、「経験者(experiencer)」といった主体の「意味役割」という要因があげられる。また、「二者の参加」という捉え方について、Jacobsen(1991)では、関与物が一つしか関わっていない次の(2)(3)のような自動詞文の場合にも、「動作主」と「対象物」という関係が成立するものであるとしている。

(2) 人が歩いている。(A person is walking.) 意図的自動詞文

(3) 花瓶が壊れた。(A vase broke.) 変化を表す自動詞文

意図性に対する捉え方について、Jacobsenでは、動作主と変化を被る対象物は、構文上表されている者(物)のみを指して定義化しているのではなく、(2)の例に見られるような「自分自身」をも指して用いる概念であると思われる。構文上、他動詞文のように「二人以上の参加者」という構造を持たない自動詞文において、「動作主」と「被動者」が同一であっても意図性を媒介として、意味的には「動作を行う者」と「動作によって変化を被る者」というつながりを示すものと捉えることができる。例えば、「走る」「飛ぶ」「泳ぐ」など、意図的行為を表す自動詞すべてにおいて、動作主が行為をなすと同時に、その結果ある変化を被る(空間的位置が変わる)という再帰的な意味が働いていると述べている。

以上のことから《可能》における「意志性」の考察に関して、その要因を、(i)主体の「動作主性」と(ii)「意味役割」、及び(iii)動詞の「意味特徴」をあげ考察を進めていく。

## 《可能》における自動詞の形態的分類と特徴

### 4. 《可能》における自動詞の特徴

#### 4.1 《可能》の表現形式と共起する自動詞

先の表1に示したように《可能》の表現形式と共起する自動詞は、次の二つのタイプに分けられる。

- [1] タイプ1の自動詞：「(ら)れる」「ことができる」両方共と共起する自動詞で、主体自らの動作、状態に関する《可能》を表し、主体は動作主、及び被動者としての意味役割を持つ。これらの自動詞は、主体の「意志性」を表すことができる。
- [2] タイプ2の自動詞：「ことができる」のみと共起する自動詞で、主体の状態に関する《可能》を表し、主体は動作主ではなく被動者としての意味役割を持つ。これらの自動詞は、主体の「意志性」を表すことが難しい。

以下、これらの二つのタイプの自動詞について考察していく。

#### 4.1.1 タイプ1の自動詞に見られる特徴

タイプ1に分類した自動詞には、「上がる、止まる、変わる、集まる、入る、動く、倒れる、落ちる(fall)、隠れる、消える(go out)、燃える、まとまる、歩く、走る、泳ぐ、駆ける、滑る、飛ぶ」などが含まれ、次の(4)のような特徴を持つ。

- (4) a. 動作主性：有生
- b. 主体の意味役割：動作主、及び被動者
- c. 自動詞の特徴：主体の意志性が表せる

これらの自動詞の特徴を、まず「動作主性(4a)」から考察していく。次の(5)は「上がる」、(6)は「隠れる」の《可能》を用いた例であるが、主体が有生の場合のみ適格文となり、無生では表現することができない。このように主体が有生でなければ適格文とはならないという動作主性の特徴は、タイプ1にあげた自動詞の可能表現に共通しているものである。

- (5) a. 太郎はどんな高い所にでも怖がらずに {上がれる／上がる} ことができる} 。
- b. 景気は不安定ではっきりしたことは誰にも分からないが、円だけは当分 {\*上がれる／\*上がる} ことができる} かもしれない。
- (6) a. 部屋がたくさんある家では、子供はどこにでも {隠れられる／隠れ

## 言語科学研究第3号(1997年)

ることができる} ので、楽しそうだ。

- b. この箱はソファの後ろに {\*隠れられる/\*隠れることができる} 。

また、主体が「人間」以外であっても、つまり有生でありさえすれば適格文となるかという点については、(7)に示したように「意志性」の表出の程度は下がると思われるが、(5)(6)の(b)のような無生主体に比べ、不自然さは感じられない。

- (7) 自然が少なくなると、公園には小鳥も {集まれない/集まることできない} 。

次に、主体の「意味役割(4b)」について、(8)の「消える」(9)の「動く」を例に見ていく。この(8)(9)では動作主が被動者という二重の意味役割を担っているものである。

- (8) 忍者は好きな時にいつでも {消えられる/消えることができる} 。

- (9) 小錦は土俵の上で敏速には {動けない/動くことできない} 。

このように主体の「意志性」を表す動詞というものは、(5)から(9)で見てきたように、主体の行為について述べているものである。このような特徴は動作性のあるものに限定されている訳ではなく、次のような状態性が感じられる自動詞の場合でも表すことができる。(10)「燃える」は動作性を感じない自動詞であるが、今まで考察してきた例と同じように(a)(b)では有生主体「彼」が、自らをその状態に促すという意志を表すのに対して、(c)の無生主体「炭」では、何も表すことができず不適格文となる。

- (10) a. 長い間の夢が叶って新しい仕事を始めるので、これからは {燃えられる/燃えることができる} であろう。

- b. 彼は人生に疲れ果てて、何に対しても昔のようには {燃えられない/燃えることできない} と言う。

- c. この炭は簡単に {\*燃えられない/\*燃えることできない} 。

以上の考察から、タイプ1にあげた自動詞の《可能》は、主体が「有生」で、なおかつ「動作主」と「被動者」の意味役割を兼ね備え、主体の意志によって動作、状態が成立するという意味内容を表すものである。

次に、「(ら)れる」とは共起しないが、「ことができる」では《可能》を表すことができる自動詞について、タイプ1の特徴と対比させながら見ていく。

## 《可能》における自動詞の形態的分類と特徴

## 4.1.2 タイプ2の自動詞に見られる特徴

タイプ2に分類した自動詞には、「助かる、治る、育つ、静まる、増える、覚める、伸びる、慣れる」などが含まれ、次の(11)のような特徴を持つ。

- (11) a. 動作主性：有生  
 b. 主体の意味役割：被動者  
 c. 自動詞の特徴：主体の意志性を表しにくい

まず、「動作主性(11a)」から見ていくと、次の(12)の「助かる」では主体となるのは(a)「父」のように有生の場合であり、「命が助かる」という意味を表すもので、(b)のように無生では文を作ることができない。これは、タイプ2にあげた自動詞の《可能》に共通して言えることである。

- (12) a. 父は交通事故で怪我をし命も危なかったが、すぐ病院に運ばれて手術をしたお陰でなんとか {\*助かれた/助かることができた}。  
 b. 今度の旅行はグループで申し込んだので、費用が少なくて済み {\*助かれた/\*助かることができた}。

また、タイプ1で考察したように、動作主性について主体が有生であれば「人間」以外でも適格文となるかという点については、(13a)が示す通り適格性には問題がない。しかし、無生では(13b)のように不適格文となる。

- (13) a. ネズミは溝の中でも {\*増えられる/増えることができる}。  
 b. 余分なお金を銀行に預けておけば、少なくとも利息分だけは {\*増えられる/\*増えることができる}。

(12)(13)の動作主性は、タイプ1で考察した有生主体と同じ特徴を表しているが、同じ有生主体でも(12a)(13a)の例において、タイプ1と明らかに異なるのは、主体が動作主という意味役割を持っていないということである。つまり、(12a)の「父」、(13a)の「ネズミ」は有生ではあるが、意味的には主体＝被動者という意味役割を表しているもので、このように意味役割が被動者というのはタイプ1の主体＝動作主に比べると、主体の「意志性」は遥かに低くなることが分かる。

また、次の(14)の「太郎」(15)の「観客」についても同様で、それぞれ主体は被動者としての意味役割を担い、(14)には「太郎を育てた人」、(15)には「観客を静めた人」という動作主が存在することを表している。

## 言語科学研究第3号(1997年)

- (14) 太郎は裕福な家庭に生まれたので、経済的な苦勞を知らずに {\*育てた／育つことができた} 。
- (15) バレーボールの試合中、観客が興奮しすぎて試合が一時中断されてしまったが、場内アナウンスでやっと {\*静まれた／静まることができた} 。

このようにタイプ1で考察した自動詞に比べると、(12)から(15)で考察した自動詞は、動作性が弱いと言える。動作性より状態性の強い自動詞の特徴は、次の(16)(17)の例でも分かるように、主体の意志によってその結果を決めることができるものではないということに表されている。つまり、(16)の「(試験に) 受かる」か否について主体の「太郎」には決めることができず、同様に(17)の「(習慣に) 慣れる」か否かも「太郎」の意志を超えたものである。このように動作性よりはむしろ状態性を帯びている自動詞は、「意志性」の表出が困難であることから《可能》の形式素「れ(る)」及び「られ(る)」を付加することができないと考えられる。

- (16) 太郎はずいぶん勉強したが、結局試験には {\*受かれず／受かることができず} 残念だった。
- (17) 太郎は度重なる海外出張で、苦手だった飛行機での長旅にも {\*慣れられた／慣れることができた} 。

以上の考察から、《可能》におけるタイプ2に属する自動詞の特徴というのは、主体が「有生」でも、「被動者」としての意味役割を持つものであるため、「意志性」を表出しにくい。このような自動詞文の《可能》は、他動性の要素が低くなり、《可能》は「ことができる」という表現形式によって表される。次に、《可能》の表現形式と共起しない自動詞について見ていく。

#### 4.2 《可能》の表現形式と共起しない自動詞

《可能》の表現形式と共起しない自動詞も次の二つのタイプに分けられる。

- [1] タイプ3の自動詞：含意された動作主の存在を感じるもので、自動詞文を他動詞文の《可能》に置き換えても意味内容が変わらない。
- [2] タイプ4の自動詞：接辞 *-eru* を付加することによって作られる可能動詞と同形で表される。

以下、この二つのタイプの特徴について考察していく。



## 《可能》における自動詞の形態的分類と特徴

## 4.2.1 タイプ3の自動詞に見られる特徴

タイプ3に分類した自動詞には、「決まる、載る、開く、閉まる、広まる、縮む、掛かる、混ざる、始まる、落ちる(come off)」などが含まれ、次の(18)のような特徴を持つ。

- (18) a. 動作主性：無生  
 b. 主体の意味役割：被動者（含意された動作主）  
 c. 自動詞の特徴：主体の状態を表すもので、《可能》が含意されているように感じられる

まず、「動作主性(18a)」について見ると、次の(19)では、主体「ドア」は無性であることから、その「意志性」についてこの文では表わすことができない。つまり、タイプ1、2の自動詞で考察したような動作主性と主体の意味役割は考えられない。

(19) ドアが {開かない / \*開くことができない} 。

(19)におけるドアは、「飾りドア」でない限り、開くように作られているものである。従って、「ドアが開かない」というのは、「開くドア」「開かないドア」というような単に資質を述べているのではなく、このような文の背後には動作主が存在し、その行為が成立するか否かという内容を含意しているものと考えることができる。このことから(20)の例においても(a)、及び(c)の「開かない」を(b)の「開けられない」に置き換えても意味内容は変わらないものであると思われる。

- (20) 玄関の鍵が (a) 開かないのですがと訴えると、博士は「おお、もちろんだ。そいつは誰にも (b) 開けられない」と妙なことを言った。...しかし、むろんそんな子供騙しでは壊れた鍵は (c) 開きはしなかった。

(『林望のイギリス観察辞典』1993 p.195)

また、先に述べた Jacobsen (1991)では、「花瓶が壊れた(3)」のような自動詞文の背後には、真の動作主の存在が感じられると指摘している。(3)の意味内容は、それが意図的に行われたことであっても、あるいはそうでなくても花瓶に何かの力が加わったことを表しているものであると考えられる。このような自動詞文の背後には真の動作主の含意が考えられるという点について、Jacobsenでは、次の(21)を例にあげ、それぞれ「開けることができない」「片付けることができない」「入れることができない」と置き換えができることから、《可能》の意味が絡んでいると

言語科学研究第3号(1997年)

述べている。

- (21) a. いくら押しても、窓が開かない。  
(No matter how much I push, the window won't open.) (i.e., can't open.)
- b. リンゴは全部この箱に入らない。  
(The apples won't all (i.e., can't all) fit into this box.)
- c. そう複雑な問題はそう簡単には片付かない。  
(Such a complex problem is not (i.e., cannot be) dispensed with so easily.)

この点については、森田(1981)でも(22)のように行為者が実現を試みた結果を問題にしている自動詞文は、(23)のようにそれぞれ「決められない」「載せられない」という他動詞文の《可能》に置き換えても表現事実に違いが生じないとしている。

- (22) a. なかなかシュートが決まらない。  
b. 荷台が高すぎて荷物が載らない。
- (23) a. なかなかシュートが決められない。  
b. 荷台が高すぎて荷物が載せられない。

このように自動詞文を他動詞文の《可能》に置き換えても意味内容が変わらないのに対して、次の(24a)のような単に主体の属性を表すものは、置き換えることができない。

- (24) a. このセーターは熱湯で洗っても縮まない。  
b. このセーターは熱湯で洗っても縮められない。

つまり、(22)の自動詞文から(23)の他動詞文の《可能》に置き換えても意味的には変わらないと感じるのは、これらの自動詞文の後ろに真の動作主がいることを想定できるからであると考えられる。

以上の考察から、《可能》におけるこのタイプに属する自動詞の特徴は、自他の対応における構造からも、また他動詞文の《可能》に置き換えても同じ意味内容を表すということからも、これらの文には含意された動作主の存在が認められるものである。しかし、含意された動作主の存在が認められてもこのような無生主体の自動詞文において「意志性」が表出されるということはないため、《可能》の接辞

## 《可能》における自動詞の形態的分類と特徴

「(ら)れる」を付加することも「ことができる」の形を取ることもしない。これらの自動詞では「意志性」が表せないという反面、《可能》が含意されているように感じられるという特徴が見られることから、《可能》の表現形式と共起しないもう一つのタイプの自動詞について、「意志性」の表出が薄れるにつれ、自動詞に《可能》の意味が含まれるように感じられるという点を考察の対象として進めていく。

## 4.2.2 タイプ4の自動詞に見られる特徴

タイプ4に分類した自動詞には、(1)「見える、聞こえる」のように主体の知覚能力を表すものと、(2)「折れる、削れる、切れる、売れる、割れる、破れる、焼ける、脱げる、縫える」など他動詞「折る、削る、切る、売る、割る、破る、焼く、脱ぐ、縫う」に接辞 *-eru* を付加することによって作られる可能動詞と呼ばれるものと同形であるものの二つに分けられる。

二種類あるタイプ4の自動詞の一つ「見える、聞こえる」の特徴は、次の(25)に示した通りである。

- (25) a. 動作主性：有生  
 b. 主体の意味役割：経験者  
 c. 自動詞の特徴：接辞 *-eru* によって作られる主体に備わった知覚能力を表し、《可能》を含意

知覚能力を表す自動詞「見える」「聞こえる」は、次の(26a)「見ゆ」、(27a)「聞かゆ」の形が歴史的変化の規則によって、(26b)「見らる」、(27b)「聞かる」の形となったものである。消えるべきはずの「見ゆ」「聞かゆ」の形は変化することなく残り、新たに生まれた「見らる」「聞かる」と併存した形として残ったものである。「聞かる」は可能動詞の成立により「聞かれる」と「聞ける」が併存した形となり、結局「聞ける」が優先されるようになったと言われている(小矢野1981)。

- (26) a. 見る+ゆ=見ゆ → 見える  
 b. 見る+らる=見らる → 見られる  
 (27) a. 聞く+ゆ=聞かゆ(聞こゆ) → 聞こえる  
 b. 聞く+る=聞かる → 聞かれる/聞ける

言語科学研究第3号(1997年)

このように「見ゆ」「聞かゆ（聞こゆ）」が変化した形の「見える」「聞こえる」は、可能動詞と呼ばれる動詞と形態上は同じ *-eru* という接辞によって作られている自動詞であることが分かる。《可能》を表す「見える」「聞こえる」の文構造は、(28) のように示される。

$$(28) \quad N1 \left\{ \begin{array}{l} \text{に} \\ \text{には} \\ \text{は} \end{array} \right\} N2 \text{ が } V$$

(28)が明らかに主体の持つ能力を表すと言えるのは、(29)のようにN1の主体が「有生」の場合、N2が「眼」「耳」のような感覚器官そのものを表す場合である。

- (29) a. 太郎には視力検査表の一番下の字までもが見える。  
 b. 犬には人間よりも遥かに小さな音でも聞こえる。

このような人間に生得的に与えられている能力を表す「見える」「聞こえる」には《可能》が含意されていて、主体の意志によって影響を受けるものではないことから、「(ら)れる」「ことができる」というどちらの表現形式とも共起できないものとする。

二種類あるタイプ4のもう一つの自動詞「折れる、削れる、切れる、売れる、割れる、破れる、焼ける、脱げる、縫える」の特徴は、次の(30)のようになる。

- (30) a. 動作主性：無生  
 b. 主体の意味役割：道具  
 c. 自動詞の特徴：接辞 *-eru* によって作られる

主体が道具としての役割を持ち《可能》を含意している

これらの自動詞は、(30c)に示したように接辞 *-eru* を付加することによって作られる他動詞の《可能》と同形である。つまり、それ自体他動詞の可能形として性質を併せ持っていると考えられるものである。寺村(1982)では、可能表現について次の(31)のように示している。

- (31) a. Yニ／ガ Xガ V-e-(ru) 彼ニ／ガ コノ瓦ガワレル (コト)  
 b. Yガ V-e-(ru) 彼ガ泳ゲル (コト)

この(31)のような可能表現の構造において、主体の能力、あるいは可能な状態を表す「Y」という主体を持つ時には、《可能》と《自発》には明らかに違いが生じ

## 《可能》における自動詞の形態的分類と特徴

ることが分かる。しかし、主体「Y=彼」が文の表面から消えた場合、つまり次の(32a)のように受動的可能表現 (passive potential) をとると、その形は(32b)の《自発》と同じになる。つまり、(32a)の「売れる」が「この瓦は売ることができるか？」または「売ることができる商品か？」という意味を表す時は《可能》となり、「自然にそうなる」という意味の時は《自発》となると寺村では述べている。

- (32) a. この瓦は売れるか？  
b. この瓦は（よく）売れるか？

つまり、タイプ4に分類した自動詞が、《可能》の意味を表すのは次の(33)のような場合である。(33a)の「切れる」は、「この包丁で固い魚でも切れる」という意味を含意し、行為の手段、「道具 (Instrument)」としての意味役割を担っている。

(33) この包丁は何でも(a)切れるが、私には生きた魚が怖くて(b)切れない。

先の「見える」「聞こえる」が《可能》の意味を表すのは、主体が経験者としての意味役割を担っていたのと同様に、「切れる」「削れる」「折れる」などの自動詞が《可能》の意味を含意するのは、道具としての意味役割持つ場合であると考えられる。

つまり、二種類あるタイプ4の一つ「見える」「聞こえる」は、主体が有生であるため、自動詞はその主体に備わった知覚能力を表すものであったが、タイプ4のもう一つの自動詞においては、主体が無生であるためその主体は道具として役割を表すものとなる。これらの自動詞は形態上からも、意味においても「見える」「聞こえる」と同じように《可能》を含意するという特徴を表していると考えられるものである。以上のことから、タイプ4にあげた接辞 *-eru* が付加されて作られる(25)の特徴を持つ知覚動詞「見える」「聞こえる」と(30)の特徴を持つそれ以外の自動詞は《可能》を含意し、「意志性」によって影響を受けることがないため、「(ら)れる」「ことができる」両方とも共起しないと考える。

## 5. まとめ

自動詞を《可能》の表現形式「(ら)れる」、及び「ことができる」と共起するか否かで四つのタイプに分類した。タイプ1の自動詞は、主体が「有生」で「動作主」と「被動者」という意味役割を持つことにより、主体の「意志性」を表すことができる。これらの自動詞は「(ら)れる」「ことができる」の両方の表現形式

## 言語科学研究第3号(1997年)

と共起する。また、タイプ2の自動詞は、主体は「有生」ではあるが「被動者」という意味役割を担うため、主体の「意志性」を表すことが難しく、「(ら)れる」とは共起せず「ことができる」によって《可能》が表される。これらの《可能》の表現形式を持つ自動詞に対して、タイプ3、4の自動詞は、どちらの表現形式とも共起しない。タイプ3の自動詞は、動作主の含意が認められ他動詞の《可能》に置き換えても意味内容は変わらず、《可能》が含意されているように感じられる。また、タイプ4は「-eru」という接辞によって作られる可能動詞と同形で表され、形態上からも《可能》との関わりが認められる。また、意味上からも主体に備わった能力、あるいは「道具」としての役割を表すもので、《可能》が含意されていると考えられる。考察結果は、表2のように表すことができる。

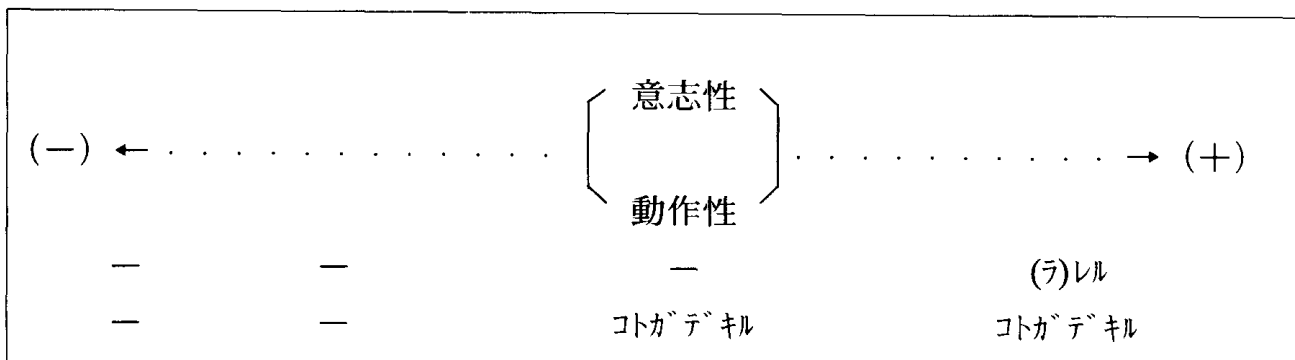
表2

	表現形式	動作主性	主体の意味役割	自動詞の特徴
タイプ1	(ら)レル コトガデキル	有生	動作主 被動者	動作性が強い 意志表出が可能
タイプ2	コトガデキル	有生	被動者	状態性が強い 意志表出が困難
タイプ3	—	無生	被動者(動作主の含意)	可能の含意の可能性
タイプ4	—	有生 無生	経験者 道具	可能の含意

《可能》におけるこれら四つの自動詞の特徴における関連性は、次の表3のようになる。主体の「意志性」が表される自動詞の《可能》は、動詞の特徴から見ても動作性が高く「(ら)れる」「ことができる」という表現形式と共起するが、主体の「意志性」が低くなるにつれ、動詞の特徴も動作性から状態性の強いものとなり、「ことができる」では表されても「(ら)れる」とは共起せず、さらには「ことができる」とも共起しなくなる。また、これらの表現形式と共起しない自動詞は、《可能》が含意されていると感じられるようになる。

《可能》における自動詞の形態的分類と特徴

表3



西尾 (1978、1988)では、自動詞の意味について「非情物・有情物の状態の変化→有情物の無意志的な動き→有情物の意志的な動作」(p.186、p.190)という転化があると仮定している。表3には、自動詞の中にも他動性の低いものから高いものへつながる変化があることを示しているという点で、西尾で述べられている仮説と基本的には同じ雛型を表していると言えるであろう。表2、3によって、自動詞の意味的な変化だけではなく、今までの考察を通して述べてきた主体の「意志性」と自動詞の持つ意味的特徴が、《可能》の表現形式とどのように関わっているかという点についての考察を示した。

【引用出典】

林 望 (1993) 『林望のイギリス観察辞典』平凡社

【参考文献】

井島 正博 (1991) 「可能文の多層的分析」仁田義男(編)『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版

井上 和子 (1976) 『変形文法と日本語』上巻・下巻 大修館書店  
 (1995) 「他動性と使役文」徳永美暁(編)『言語変容に関する体系的研究及びその日本語教育への応用』文部省科学研究費一般研究(B)研究結果報告書

奥津敬一郎 (1967) 「自動化・他動化および両極化転形—自他の対応」『国語学』70

小谷野哲夫 (1981) 「現代日本語可能表現の意味と用法Ⅲ」『大阪外語大学学報・言語編』54

坂梨 隆三 (1969) 「いわゆる可能動詞の成立について」『国語と国語学』46-11

渋谷 勝巳 (1993) 「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33

寺村 秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味I』くろしお出版

言語科学研究第3号(1997年)

- 蔦原伊都子 (1976) 「視覚動詞「みる」・「みえる」の意味記述」『語文』42大阪大学
- 中右 実 (1991) 「中間態と自発態」『日本語学』vol.10
- 西尾 寅弥 (1978) 「自動詞と他動詞における意味用法の対応について」『国語と国文学』55-5
- (1988) 『現代語彙の研究』明治書院
- 原口 裕 (1985) 「可能表現「スルコトガデキル」の定着」『国語と国文学』62-5
- 森田 良行 (1981) 『日本語の発想』冬樹社
- Comrie, Bernard. (1981) *Language Universals and Linguistic Typology. Syntax and Morphology.* Basil Blackwell.
- Hopper, Paul J. and Thompson, Sandra A. (1980) "Transitivity in Grammar and Discourse" *Language.* 56-2, 251-299.
- Jacobsen, Wesley M. (1991) *The Transitive Structure of Events in Japanese.* Kuroshio Publishers.
- Shibatani, Masayoshi. (1985) "Passive and Related Constructions:A Proto-type Analysis" *Language.* 61-4, 821-848.

付記： 本稿は、1996年1月神田外語大学大学院言語科学研究科に提出した修士論文「可能の概念と意味範疇」の一部に加筆修正したものである。御指導下さった徳永美暁先生をはじめ、大学院の諸先生方に心から感謝の意を表したい。